



校長室だより

学校と家庭・地域を結ぶ架け橋通信

第4号 令和3年5月11日

小美玉市立美野里中学校

ヤマアラシ（ハリネズミ）のトゲ

現代の青年の友人関係に変化が見られるという指摘があります。

まず、相手に深入りしない傾向です。相手を傷付けたくないし、自分も傷付きたくないために一定の距離を置いてしまうのです。だから、なかなか「腹を割って付き合える」友人ができにくいというのです。

一方、一人になることを極端に恐れ、群れをつくる傾向です。孤独になりたくないから、友達に無理に合わせてしまうのです。

この二面性のために、友達との距離がうまく保てずに、疲れ果ててしまう子供も出てしまいます。

ドイツの哲学者ショーペンハウアーが執筆した、随筆集「余禄と補遺」の中に「ヤマアラシのジレンマ」という下のような寓話があります。

冬の寒い日に、ヤマアラシの群れがお互いの体をくっつけて温め合おうとしました。

しかし、双方の針毛が刺さり痛くてすぐに離れてしまいます。

離れると寒いのでまた体を寄せ合いますが、やはり針毛が痛くてくっついていられません。

ヤマアラシたちは、くっついたり離れたりを繰り返して、いい距離を見つけることができたのです。



この寓話は人気アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』でも取り上げられているそうですが、人間関係における心理的距離感の葛藤を表しています。

友達と離れているのは、寂しい。でも、お互いのトゲで、「傷付けられたくない」「傷付けたくない」。これは、まさに「思春期」の子供たちの心理そのものではないでしょうか。

前述の寓話の後半部分に「ヤマアラシたちは、くっついたり離れたりを繰り返して、いい距離を見つけることができた」とあります。

つまり、「いい距離を見つける」ためには、「くっついたり離れたり」する経験が必要だということになるのでしょうか。

勉強だけでなく、その経験を得るために、学校という場は必要なのかもしれません。

そうは言っても、どんな心構えがあれば、「くっついたり離れたり」できるのか、親として、子供たちのこの「くっついたり離れたり」の人間関係をどのように支えていったらよいのか。この後も考えていきたいと思います。